

特集

わたしの「楽しい」が地域の力になる😊



皆さんは、どんなことをしている時に「楽しい!」と感じますか?特に、自由な時間が多第2の人生といわれる期間をいかに「楽しく」、自分に合った社会や人とつながって過ごすかは、その人の人生の豊かさにも関わってきます。今月は、第2の人生の活躍場所を地域に置いて、地域とつながり、自身の「楽しい」を実現している皆さんをご紹介します。

表紙

今月の市民力

子どもからお年寄りまで地域の人が気軽に集まれる場所、みの元気塾。この日の竹細工教室には、地域の竹細工同好会や民生委員の皆さんが駆けつけ、吉津幼稚園児に知恵を伝えていました。「子どもたちのいろんな発想に触れられてこちらも楽しいですよ。自然に親しんでもらう機会になれば」と竹細工同好会代表の佐藤馨さん。ここには、地域を思うたくさんの心が集まっています。



三豊市の人口 ※平成25年7月1日現在 ()内は前月比
世帯数 23,121 世帯(-23) 総人口 66,899 人(-79) 男 31,884 人(-35) 女 35,015 人(-44) ※香川県人口移動調査による

~市ホームページには情報が満載~
Mのみちるべ
http://www.city.mitoyo.lg.jp/ 三豊市 検索

みんなでの市民力都市
トップページ「行政情報」→「市民活動」をクリック!
本格的に活動をスタートしたまちづくり推進隊がホームページを開設しました。まちのイベント情報だけでなく、日常の出来事などもつづってありますので、楽しみながら見ることが出来ます。また、すべてのまちづくり推進隊がフェイスブックも開始して、多くの人とつながりを増やしています。皆さんも「いいねボタン」を押して推進隊とつながってみませんか。

まちづくり推進隊が地域の情報を発信中!

わたしの「楽しい」が地域の力になる

一瞬でも誰かの居場所になれば 嬉しいですね

みの元気塾 塾長 関 博さん(72)



人が集まる場所 みの元気塾発足

始まりは 地元への感謝から

退職をして地元に戻り、民生委員や社会福祉協議会の役員などを引き受けた関博さん。「父は私がまだ東京で在職中に、母は私が帰って3年目に亡くなりました。退職するまであまり帰れませんでしたが、父と母

がこちらでなんとか生活できたのも地元の皆さんのおかげ。お世話になったと感謝しています。そんな地元にも私ができることをさせてもらおう、それがさまざまな役を引き受けたきっかけです」

役を通して、それぞれのところで起こる問題の解決策が同じところにあることに気付きます。

「きっかけは孤独死。田舎で孤独死なんてびっくりします。これを防ぐには、民生委員だけでも社協のデイサービスの担当者だけでも難しい。単一組織ではムリだと限界を感じました。一人の人の関わっている人たちのネットワークをつかって情報交換をすれば、大きな力になるのではないかと。そこで、一つのところに人が集まって、常に皆で互いに見守れる場所ができたと思います。それが『みの元気塾』を発足させた理由です」

世代を 超えた場所に

みの元気塾は、平日使っていない遊休施設を利用して、この2月にスタートしました。「コンセプトは『お年寄りを元気にすること』ですが、世代を超えて利用してもらいたいと考えています。やはりお年寄りの元

室などを開催しました。8月には先生や専門家を呼んで、小学生の夏休み宿題対応の寺子屋を開く予定です。「今は、1日平均15〜20人、イベント時には50〜60人来てくれます。子どもからお年寄りまでが空いた時間に気軽に集い、楽しいと思ってくれる場所になればいいですね」

喜んでくれる人が いる限り続けたい

必要です。生活の知恵など自分の知識を伝授することが、生きがいにつながるかもしれません。そのためにも、いろんな世代の人がここを訪れるようなイベントを計画。これまでに、手芸やコーヒーの入れ方教室、幼稚園児が訪問し

「この間も毎日来ていた一人暮らしのお年寄りが、ふと来なくなつて心配していたら『旅行に行つてたよ』とひよっこり顔を出してね、『よかつたね〜』と皆でほつと安心しましたよ。ほかにも、市外から嫁いできたお嬢さんが淋しい思いをしていたんだけど、ここにきて、図書コーナーの本や料理のレシピ本を読んだりしているうちに来塾者と仲良くなつてね、今すぐく楽しそうな顔をしていますよ。そうやって、見守り見守

地域の人の 支えられて

られ、一瞬でも居場所になつていることが嬉しいです。一人でも二人でも喜んでくれる人がいる限り続けたい、と私は思っています。一人でもそこに居場所をもとめたとえば自殺を防げられたら御の字。やつた価値がある、と思えます」

「運営は地区社協やボランティアの皆さんが行っています。また、塾の近くの人も、野菜や果物を分けてくれるので、リーズナブルにランチを出すことができます。お皿や備品は、呼びかけに応じた地元の人が提供してくれました。地域の人が常に気にかけて、サポートしてくれることに本当に感謝しています。食事を作るボランティアの人も子育てをしながら親の介護もしている世代。忙しい合間を縫って来てくれるのは、心のどこかに人のためになりたいと思う気持ちが、み

最後の20年は 恩返しをする時

周りの人には「口より先に行動をしている、聞いたときには結果報告だ」と言われる関さん。

「数字的な歳というものには意味がないと思っています。やりたいことはやっていきますし(笑)、歳という概念にしばらくはあきらめません。ただ肉体的な歳は感じますけどね。ペースを変えるだけです。生き方は変わりません」

人生80年とすると、最初の20年は大事に育ててもらった時、そこから60歳までは、自分自身のことで一生懸命な時、もちろん家族もそうですよね、そして最後の20年は、世の中のために何かやるべき時、恩返しする時だと思っています」



ボランティアの皆さんによる心のこもった食事が並びます

わたしの「楽しい」が地域の力になる

友だちを呼んでふるさとを自慢したい

仁尾まちなみ創造協議会
まちづくり推進隊仁尾

中村和良さん(67)



仁尾を活性化したい

「仁尾からの海の眺めは本当に綺麗ですね。仁尾はいいところがいっぱい。この間も東京から友人を2組招き、桜の季節に市内を案内しましたが、想像の美しさをはるかに越えていたようでみんなびっくり。「事情が許せば、私たちも住みたい」なんて、すごくうらやましがっていましたよ。過疎化過疎化というけれど、田舎暮らしは都会の人の憧れです」

中村和良さんは、退職後Uターンで三豊市に帰ってきました。「仁尾は、とにかく観光資源が豊富なところ。文化や歴史もたんとつまっています」もっと仁尾

すね。そうすることでまた子どもたちも、自分のふるさとに帰ってきてくれるような気がします」

まずは自分たちが楽しむ

今年68歳。「昔から人と一緒に何かをするのが好きで、今はとても楽しいですよ。体力は昔に比べてついていかないですが、常にチャレンジするものを見つけていくことが若さを保つ秘訣だと思っています。若い人と接することも大切、理屈ではなく感覚で、自分では考え付かないような意見が出てきて刺激を受けます。これまで人生でやってきたことはムダではなかったなと感じます。望みは、海外も含めて市に観光のお客さんが来てくれること。まずは自分たちが楽しんでやれば外から来た人も楽しいんじゃないですかね。形になったら友達を呼んで、こんなふるさとなんだって、自慢したいですね」

退職後は地元のために何かしたかった

仁尾を盛り上げていこうとする想いは強く、まちづくり推進隊仁尾にも加入し、観光部長を務めています。「葛島にお客さんに来てもらおうとメンバーや有志で清掃や遊歩道の整備をしています。さっそく家族連れで訪れてパーベキューなどをして楽しんでくれる人がいて嬉しいですね」

パワフルに活動する中村さんを、突き動かすものを聞いてみました。

「そうですね、やはりふるさとですね。小学生の時に葛島でよくキャンプをしてサザエを取ってつば焼きにして食べたこと、粟島で綺麗に光る夜光虫を見たこと、大坊市や津嶋神社の屋台を楽しんだこと。懐かしいですね。子ども時代の思い出は、一生の思い出です。振り返ると東京でいた方が長いのに不思議なものです。今の子どもたちにもそんな場所を提供してあげたい

り上がり。これらをリンクさせて、市にもっと人を呼び込むシステムづくりができたらと考えています」

一番の魅力は「人」

「外からここに来て感じる魅力はたくさんありますが、一番魅力的なのは、地元の人とのふれあいだと思います。私自身、いろんな会や行事に出て、いつも地元の皆さんが、方言も忘れかけているよそのものを受け入れてくれ、疎外感を感じたことが一度もありません。それどころか「やれよ、頑張れよ」と励ましてもらっています。

その良さを活かして、まち全体での受け入れ態勢づくりができたらいいですね。ここに住む人たち一人ひとりが自信を持って、「仁尾はいいところ」って、すぐに魅力を語れることが大切なことだと思います。そんな体制が作れるように力を尽くしていきたいですね」

人を呼ぶために

を活性化させたいと思っていた中村さんに、ちょうど立ち上がった「仁尾まちなみ創造協議会」から声がかりました。

「本当にグッドタイミング」。仁尾まちなみ創造協議会は、地域の発展のために地域が結集し、仁尾の魅力を発信することを目的として設立されたものです。「仁尾の昔ながらの松賀屋の再生を中心にその界隈を盛り上げようと、部会で話し合うと、『カフェや仁尾の名産品を売れる場所がないか』と若いメンバーがどんどん意見を言ってくれます。アイデアなんかは若い人がメインになるのがいいですね。私たちは、若い人が壁にぶつかったり、投げ出したりしたときに、続けられるようにフォローする役だと思っています」

また根付いた伝統も素晴らしいと中村さん。「竜まつりは珍しいし、すごい盛



仁尾を盛り上げようと活発に意見を交わします

Man Power 05

わたしの『楽しい』が地域の力になる
面白がってくれる姿をみたら
こっちも嬉しいで

この道
27年

山北 友良さん(82)



栗島ふるさと劇団座長の山北友良さんは、21歳のときから船員として世界中の海を渡り、55歳で船をおりました。それから、地元で栗島のために活躍し、劇団のほかにも交通指導員、老人クラブ会長、栗島芸術家村運営委員など、さまざま

な顔を持っています。栗島ふるさと劇団は、老人ホームや敬老会などで何か良い催し物はできないかと考え、始めました。栗島の地元のメンバーと組み、ほとんどボランティアで活動し、今年で15年目を迎えます。今では役者、メイク担当など15人のメンバーで、年10回くらいの公演オフアーを受け、遠征もしています。「公演のときの拍手ほど嬉しいもんはないなあ。ただ(無料)やけど最後までお客さんがいっぱいおつて帰らんってことは、きつとおもしろいけん、おつてくれるんじやないかと思とんや。まあ、銭払うんやったらもったいないけん、そらおるのはわかるけどな」と笑う山北さん。一緒に踊る人形も時間をかけ愛情をこめて作ったお手製。「自分たちが楽しんで

くれるんじやないかと思とんや。まあ、銭払うんやったらもったいないけん、そらおるのはわかるけどな」と笑う山北さん。一緒に踊る人形も時間をかけ愛情をこめて作ったお手製。「自分たちが楽しんで

しよるもんこそ、お客さんも喜んでくれると思うんや。それで面白がってくれる姿をみたらこっちもまた嬉しいし元気をもるとるで。なんともいえん」手先の器用な山北さんは、竹で籠や虫を自分で作ったり、小学校へ竹細工教室に行ったりしています。また、栗島を盛り上げるために過去には、栗島の宿泊体験で、県外から来た子どものホームステイの受け入れもしました。「一番最初に来た子は、今はもう大学を卒業して看護師の免許を取ったみたいやで。栗島にまた行きたい言うて、毎年手紙も送ってくるんや。懐かしいな」

豊かな経験をかさねてきた一人ひとりの『楽しい』が地域の元気につながります。人生90年代といわれる今日、どこで、どのように社会とつながって生きるか、人生のデザインングは自分次第です。あなたはどんな『楽しい』で輝いていますか。



秋開催の瀬戸内国際芸術祭2013 in 栗島。10月14日(月・祝)と11月3日(日)の会期中には、栗島ふるさと劇団の公演が行われます。

グラフ①

■三豊市の65歳以上の人口(市全人口からみた割合)

年	人口	割合
昭和55年	11,735人	(15.1%)
昭和60年	12,961人	(16.6%)
平成2年	14,832人	(19.2%)
平成7年	17,277人	(22.8%)
平成12年	18,970人	(25.8%)
平成17年	20,006人	(28.1%)
平成22年	20,623人	(30.1%)

資料：国勢調査

退職などで自由な時間ができ、経験も知識も豊富で、体力にも余力がある皆さんを市では、「ヤングシルバー」と呼んでいます。現在、三豊市の65歳以上の人口は市全体の30%にのぼります(グラフ①)。いかにこのヤングシルバーの皆さんが生き生きと輝いているかは、本人の生きがいだけでなく、地域の活力にもつながっていきます。決してイヤなことを頑張っているのではなく、自分の経験したことややりたいこと、好きなことを楽しみながら、あなたの力を地域に活かしてみませんか。その力の集まりがこれからの市の発展のカギを握っています。

楽しみながら
地域貢献

わたしの『楽しい』が地域の力になる

Man Power 04



楽しんで
います

ファミリーサポートセンター
「まかせて会員」

地域とのつながりを
大切にしたい

秋山民子さん(68)

退職をして時間も体力も十分にあるのに、じっとしているなんて退屈。この力を地域の役に立てられたらと思ひ、ファミリーサポートセンターの「まかせて会員」に登録しました。「おねがい会員」のお宅で赤ちゃんを見たり、保育所に迎えに行き、私の家で預かり、一緒に遊んだり、こちらで童心に戻ってしまいます。これまではずっと介護の仕事をしていましたが、子育てを経験しているので困ることなくスムーズに入っていけました。忙しいお母さんの気持ちは、私も働いていたのでよく分かります。お母さんたちが安心して仕事をできるように、援助したいですね。昔から人に喜んでもらうことが大好き。ファミサポの援助活動を通して、たくさんの人に会って、笑って、とても楽しく、毎日にハリがあります。これからも地域とのつながりを大切にしていきたいですね。

利用者の声

秋山さんには家に来てもらい、私たちが近くで仕事をしている間、子どもを預かってもらっています。介護の仕事を経験されていたということで、面倒をみる、人を相手にする、という点では同じなので、安心して預けることができました。子どもも秋山さんのことが大好き。きゃっきゃと声をあげてとても楽しそうです。

わたしの『楽しい』が地域の力になる

Man Power 03



はじめ
ました

待っていている
人がいる喜び

見守りチーム 支え愛

私たちは登録して下さっている高齢者のお宅を週に1度、訪問しています。体調を聞いたり、季節のこと、困りごとなど少しの時間お話をすることが主な活動。今まで介護の仕事なんてしたことなかったのですが、誰かが待ってくれ、できることをして喜んでくれる姿を見ると、はじめてよかったと私たちも嬉しくなります。自分たちもいつかは一人になることもあるかもしれません。そのときの不安が今の活動を後押ししているような気がします。まだまだ登録に関しては、市民の皆さんが人に頼ることに遠慮があると感じています。援助を求める人が求めやすい環境にしていきたいですね。ゆくゆくは、こまごましたことや日常で困ったことができた時に、まちづくり推進隊山本と連携して、支えられる組織づくりができればと今、話しているところです。

利用者の声

今一人暮らしでなかなか人とおしゃべりする機会がないので、週に30分でも、来ていただくと嬉しいです。ヤングシルバーと言われている世代の皆さんは、いろんな経験をしているからこそ、私の話を分かってくれ、話して、とても楽しいですね。